

空と無についての考察

——特に中論を中心として——

安井良道

龍樹の空論に於ては一切の存在の自性を否定する立場と空と無を同一視することを破する立場があると考えられる。ここに於ては空と無について考察を進めて空の概念をより明確に把握することとする。

まず無とは有を前提として考えられるもので、有の否定に於てその意義を有する。無は存在に於ける単なる存在の否定即ち存在に於ける在ることの否定であつて在るもの。そのものの否定ではない。それは存在という語に存在するものと存在することの二つの意味が考えられるからである。前者の意義の場合は「法・物」^①と訳されていて個々に在るところの何かを示している。後者に於ては「有」^②と訳しているがこれは在るものの在ることを意味し、これには無いことの概念が必ず対立する。

我々が何かが無いという時にはまだ否定されるところ

の何かを見ているのであつて、何かそのものは有である。そこには否定されるところのものが残つてゐる。故に無は相対的な否定であつて有を否定しつつ却つて有を肯定しているのである。それは在るものの有ることを否定しても、在るものそのものを否定することはできない。そして在るものが否定されなければ、やはり有ることも否定されない。それ故、有無は同一の立場にあるもので、根底に於ては有を否定し得ないのである。存在するものの実体を単なる有或は単なる無と考えるということは直接態としての有無である。

是の如く有を否定して無となすのは一切のものの絶無を意味し、所謂、虚無主義 nihilism となるのである。虚無主義は相対的である有の否定即ち有の立場に於ては人間存在の究極の原理は精神であるか肉体即ち物質であ

るかということが問題となり、どこまでも相矛盾して統一にもたらされることはなく、我々の存在を意味づける或は価値あらしめるところの何等の原理もないことになり、実践的には厭世主義へ導くものである。キリスト教的立場即ち多面的一元論よりすれば現実に存在するものは神によつて創造せられたものなるが故に初あり終りあるものとなり、又無から創造せられて有となつたが故にその実体は虚無であることとなるのである。有は相対的であつて絶対的であることはできないのであり、これがキリスト教の世界審判の思想、所謂、終末論に至つて無に帰するものである。是の如き有と無はどこまでも矛盾対立し、統一されないものである。即ち有と無との矛盾概念は絶対に両立することのできない關係に立ち、そこでは有ならば必ず非有であつて、何れも他を否定しなければ自ら成立することができないのである。有と無とは両立しないということは分別的思维的立場が常に有と無との何れかに固執するということ、有無の対立界を脱却し得ないということに他ならない。かかる分別に於ては非有といえば無、非無といえば必ず有と固執するから、如

何に非。という言葉で否定を重ねても有無対立の分別内に止まるものであり、固執を脱し得ない所以である。故に中論に於ては虚無論へ導くところの有無は排斥されるのである。③

次に空について考察を進めると、空は在るもの。の空。し。さという形で表わされているが、それは在るものに結びついてのみ理解される概念であつて空しさそれ自体というものは考えられない。即ち空自体というものを考えるならばそれは存在するものの一つになつて有となり、その語の意味は有の否定であつても無の否定にはならないのである。これは空を有の領域に於て考えるからで思维的対象界にあることになる。そこには空と名づけられる有があることになり、従つて空は無いことになる。空は諸々の存在があるように有るのではなく、在るもの。の一切の絶対否定そのものとしてあるといえる。絶対否定について龍樹は次の論証形式⑤によつて証明している。

「一切の存在は空である。

一切の存在は因縁所生の存在なるが故に、

因縁所生の存在は空である。

因縁所生の存在は自性なきが故に、

自性なき存在は空である。

自性なき存在は存在性なきが故に、

存在なき存在は空である。」

即ち(一)一切の在るものは衆縁所生なること、(二)衆縁所生なるが故に一切の在るものは自性なきこと、(三)自性なきが故に一切の在るものは存在性なきことであつて、これが空と立言する根拠となる。つまり衆縁所生なることを根拠として在るものから自性を否定し、自性なきことを根拠としてその在るものから存在性を拒否し、存在性なきことを根拠にしてその在るものの空を立言する。ここに於て在るものの空しさという命題の空しさが証明されないのである。

次に在るものとは現実的に在るところの何かである。

しかし、その何かを在るものと呼ぶ時在るものの概念そのものは何かを在らしめている性質即ち存在性に於てとらえていることを意味する。存在性がなければ在るものの概念は成り立たない。そして現実にとあるところの何かは他と差別して認識される性質即ち相 *Jaksana* を有

するのである。すべての在るものは相を有し相に於てある。しかし、相は在るものの認識される性質を形づくるが、その在るという性質(存在性)を形づくらない。所謂、それは在るものの即ち自性の概念を指していないのである。自性は「それ自らにて存在するもの」という意味を有し、在るものに存在性を与える実体であるので、自性によつて在るものの存在性が決定される。しかし、「諸法無自性、故無有有相」^⑥とあり、それ故に存在性を失えば在るものは在るものとして成立しなくなるのであり、これが在るものの空しさといわれるのであつて空とは在るものの存在性の放棄そのものである。このように一切の存在を無自性と空することは同時に一切を存在たらしめている縁起について考えなければならぬことになる。

縁起という概念は「縁つて起る」或は「縁つて起つてゐる」という意味であつて、すべての存在するものは自己のみで存在しているのではなく、他のものに依つて存在していることを表わしている。換言すれば相依ということであつて、縁つて起つてゐるものの間の相互関係を

意味するもの、即ちAはBに依つて存在していると共にBはAによつて存在しているという關係を示すものである。中論に於てこの相依を具體的に表わしているのが八不^⑦である。

八不は相依する關係にある二不が相依つて相依を表わしているのである。不は單なる否定であつて不一は一の否定であり、不異は異の否定である。しかし、この不が一と異という矛盾する概念に冠せられると不一不異として相反する二つのものの相互的關係によつて肯定の意味をもつてくる。不一不異は一の否定と異の否定に止らず、一の肯定と異の肯定をも意味するものである。即ち不一は一の否定であり、一でないものは異であるから異の肯定となり、同じように不異は異の否定であつて一の肯定である。是の如く不という否定語が肯定の意味をもつてくるのは相反する一と異の關係によるのであつて、ここに相依の相の意味があり、相互關係は相互否定的對立關係になる。單なる相關性ではなく相互否定的對立關係なるものを一に統一しているのが相依であつて、相互否定的對立の關係にあるものの間のみ成立するものである。

る。不一不異の關係は横の關係即ち時間的には同時的關係である。これに對して異時的關係即ち縦の關係の意味をも相依は表わしている。それは種子と芽^⑧、幼と壯と老^⑨との關係などはみな時間に於て成立する前後の關係であつて、種子と芽とが同一ではなく、又異なるものでもないことは不一不異である。最初の種子を離れて今の種子があるのならばそれは生じたものであるが實際はそうでないから不生であり、最初の種子が生滅したならば今の種子はあり得ないから不滅である。更に種子が芽とならずしてそのままであれば常であり、芽が種子から生じたものであるから種子は断である。

そうすると芽が他から來たものであるかといえそうではない故に不來であり、芽は蛇が穴から出るように種子から出るかといえそうではないから不出である。ここに於て不生不滅・不常不断・不一不異・不來不出という相依が表わされているのである。

このような相依に於ては相反する矛盾概念は切り離して考えることはできず、不一不異に於て一の否定を一の無自性といい、一の肯定を縁生という。これは異につい

でも同様であつて、ここに縁生の一切の存在は有にして無、無にして有とすることができる。即ち有即無、無即有であつて異は換言すれば多であるから不一不異は一即多、多即一となる。是の如き一即多、多即一の論理は連続性乃至同一性の絶対でない一と多とを即で結び、如何なる意味でも同一性のない一と多とが全く同一であるといふのである。「即」は絶対的な矛盾対立性と絶対的な同一性とを同時に具えているのであつて、それは主客対立の考え方を根定から打破した立場に立つて思惟しているからである。対象的思惟を打ち破つて、物も人も自己もこれらを対象化しないでそれ自身から考えようとするところのような論理とならざるを得ない。ここに至つて一切の存在は対象乃至客体として現れず、存在それ自身として現れる。ここに存在は存在としてあるがまに見る。即ち真如を見るのである。このような相依は主客対立の立場そのものを転換していくところに成立するものとして主体的実践的である。即ち一切のものが元来自性をもたないこと、換言すれば主客対立の立場で実在と考えられるもの（客観）は主観から執着を以て見られたのであるから真実には実在ではないということを知り、そういう自覚からしてそのような客観を真の実在と考える考え、及びそれに伴う執着性を脱していくことが実践されることは相依の論理に従う思惟に転じていくことである。この転換の行で観ぜられるのは主客対立の意識ではなくして、論法が相依即ち本来空であることである。この転換のうちに滅という意味が含まれてい

るが、しかし、それは単に有が無となるのではなくして滅して滅しないという如き意味をもっている。それはものが本来空だからである。

以上の如く空に於ける否定は単に肯定に対する否定ではなく、否定と同時に肯定を媒介する絶対否定である。唯、単に生滅がないというだけならばそれは否定を重ねただけであつて、現実に対する虚無主義となるのである。一切を否定する場合、一切は空である。一切は無である。との二つの場合が考えられるが、無は「有若不成者、無如何可成、因有有法故、有壞名為無」⁽⁹⁾の如く、+Aが-Aとなつたことであり、Aそれ自身は否定されないのである。空は自性否定によつて矛盾的対立、有無分別の相対

的立場を超越するのである。このような対立を越えた絶対否定であつて初めて肯定を媒介することができるのである。従つて、それは分別的な実体対立の世界が消滅するところに顕現する矛盾の統一の超分別的世界に他ならないのであつて、「諸法実相者、心行言語斷、無生亦無滅、寂滅如涅槃」^①とある如しである。

結局、空とは一切の存在が無自性であること、又それが有無・斷常・一異等の矛盾の統一として成立していることであり、自性が否定されればそこに相依相關的関連の統一的全体が成立し、生滅はその全体の上での生滅として肯定されることになる。これが龍樹の因縁生の立場である。

ここに考えられるのは空觀は弁証法論理と同じものであるかということである。弁証法論理に於ける否定、所謂形式的否定はAに対するAであるが、止揚否定性は虚無ではなく特定の内容の否定であつて、否定したものの關係を離れては意味のない無である。形式的否定に内容的否定を合したものととして形式と内容を綜合した具體的な否定であつて、否定を重ねることにより次元を

高めるのである。それは歴史的に展開するものであつて、矛盾概念の統一はどこまでも相対的である。

空も同じく否定を重ねるものであるがその否定は即肯定に転換し、高次元へと展開することはないのである。

これは根本的に弁証法論理は有の立場を出発点としているが、空は因縁生・無自性をその根本的立場としている故の相違である。そこに空は単なる弁証法的なものではなく、それをも含んだ相即の論理といふことができる。

註

① 中論、觀三相品、第三十一偈「若法是有者、是則無有滅、不_レ於_二法_一、而_レ有_二有無相_一」

中論、觀六種品、第五偈「是故今無相、亦無有可相、離相可相已、實亦無有物」

② 中論、觀有無品、第五偈「有若不成者、無云何可成、因有有法故、有壞名為無」

③ 中論、觀有無品、第六偈「若人見有無、見自性他性、如是則不見_二仏法真實義_一」

④ 中論、觀行品、第三偈「諸法有異故、知皆是無性、

無性法亦無、一切法空故」

⑤ 稻津紀三著「龍樹空觀の研究」二八三頁参照

⑥ 中論、觀因緣品、第十二偈

⑦ 中論、觀因緣品、第一偈「不生亦不滅、不常亦不斷、不一亦不異、不來亦不出」

⑧ 中論、觀業品、第七偈「如芽等相統、皆從種子生、從是而生果、離種無相統」

⑨ 中論、觀行品、第四偈「諸法若無性、云何說_下蠲_上兒、乃至於老年、而有種種異」

中論、觀行品、第六偈「是法則無異、異法則無異、如_レ壯_レ不作_レ老_レ、老_レ亦不作_レ壯_レ」

⑩ 中論、觀有無品、第六偈

⑪ 中論、觀法品、第七偈